

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110 - 1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

親父のおもい

伊東 伸之輔

「お前が施設長？大丈夫なのか」

入社二十四年目を迎えたこの春、息子の話を聞いた父親の第一声。今年三月、里見理事長から「伊東、お前は四月から、蔵波デイセンターの施設長だ。頼むぞ」と声を掛けて頂いた。

佑啓会でお世話になって二十四年。ほぼ四半世紀。数字にすると随分な月日であるが、光陰矢のごとし。とても密度の濃い時間であったと感じる。本当にあつという間だった。

私は平成九年三月二〇日に面接を受けて、同年四月一日から佑啓会でお世話になった。というのも福祉系の大学を卒業後、某企業にてコピー機を販売する職を三月三十一日までしていたからである。正直、営業職は自分には合っていないかった。

新人社員は営業車がなく、電車やバスを使いひたすら歩く。革靴は二ヶ月でボロボロになった。先輩から「あそこだけはいくな」と言われているにも関わらず一日の訪問件数が達成できそうにないため飛び込んだ結果、恐い人達に囲まれ迎えに来た営業所長と土下座

したこともあった。

成績も入社当初はロケットスタートであつたが秋口以降になると下降線。営業職員全員の成績が速報として、月初にFAXで流れてくるのだが、常に最下位から数えたほうが早かった。

そんな一年を経て迎えた社会人二年目の四月一日に転職した。「福祉がしたい」「少しでも良いので障害をお持ちの方の手助けになりたい」「等の想いはなく、「営業が嫌だ」という理由のみである。



福祉系の大学を卒業したが、在学中はほとんど勉強しておらず、福祉に対してのイメージや知的障害の方への理解というのは皆無だったのが、良かったのかもしれない

い。「福祉」「障害者」への変な先入観がなく、スムーズに馴染むことが出来た。入職してからは利用者と一緒に体を動かす作業活動に携わらせて頂いた。一年目は椎茸栽培。二年目は野菜を作り、その後再び、椎茸栽培へ。利用者と汗水を垂らして体を動かし、時には先輩職員と口角泡を飛ばしながら作り上げていくのは本当に充実した毎日だった。椎茸や野菜の栽培は繁忙期になると朝六時から、時にはヘッドライトを装着する時間帯から収穫に追われた。秋口は椎茸が大量に収穫出来る為、駅周辺の飲食店にいる酔客を相手に椎茸を売りに走った。

当時は職員室の横に団らん室という部屋があり、そこでよく宴会をしていた。その度に里見理事長を始め、諸先輩方からは毎回のように厳しくもありがたい言葉を頂いた。自分の弱さ、甘さを全て見抜かれ、同時に社会人を一年でドロップアウトしかけた二年生への叱咤激励であつたと思う。

入社して八年が経過した平成十七年。しぜん工房へ異動となった。現在の就労系事業の前身「旧法通所授産施設」である。利用者へ働いた対価として工賃を支払い、就職を希望する利用者へ就労支援及び定着支援を行った。

作業活動も作物栽培の他に、工場地帯にある企業と契約し除草作業を行う等、施設外での活動がメインとなった。また、一般企業で働くことを希望する利用者がいるため、作業着からスーツに着替え、安全靴から革靴を履く機会が増えた。企業の担当者とそれこそ密な関係を築くことが出来、「障害者雇用」を通じて沢山の事を学ぶ機会

を頂いた。あれほど嫌だった企業への挨拶や訪問が全く苦ではなかった。



ふる里学舎蔵波デイセンター

冒頭の父親の第一声について触れたい。父親は化学工場や石油プラント関係の建設・保守点検業務に従事し、私が小さい頃から家にいることが少なく、国内・海外問わず単身赴任生活が長かった。後期高齢者となった今も現役で、昨年台湾に数か月間、単身渡航している。その為か家族そろって食事をした記憶があまりない。

九州男児を絵にかいたような人である。職場の上司と喧嘩し、突然退職して九州の実家に一人で帰ったこともある。親族の中でも口煩い親父で、親族内で何かあると口をださずにはいられない。小さい頃は食事中にわがままを言うものなら持っている箸で叩かれた。一度は紫檀の箸が飛んできて真つ二つに折れてしまったことがある。最近、あの箸は高かったのに・・なんてぼやいているが、今なら児童相談所に通報されてもおかしくないだろう。厳しい一面もあるが時間があれば、私、弟、妹を登山等、あちこちへ連れて行ってくれた。当時は週休一日、日曜

日の早朝に出発し夜遅く帰宅。行き帰りも一人で運転していた。大変だったに違いない。

私が父親に相談もなく転職し佑啓会でお世話になると決めた時。「良いところに勤めたな」私が営業なんて向いていないことを最初から見抜いていたのだろう。正直、うれしかった。このやりとりは今でも鮮明に覚えている。父親に褒められた記憶があまりないからだ。（そもそも、私自身が親に褒められるようなことをしたことがないのだが…）

ある日、家族が久々に揃って会食する機会があつた。「まあ、お前は出世しないタイプだ。がさつで不器用で要領も悪いし、気の利いたことも言えない。でも体を使うことは厭わないだろうし真面目なところは評価されるだろうな」と言われたことがある。当時の私は若くて「勝手に決めるな」と腹の中で思っていたが、今ならその言葉がずっと身に入る。

確かに仕事はよくミスをし、怒られた。恥ずかしながら今もそうである。今夏、三つあるトマトのハウスを一晚で全て枯らしてしまつた。里見理事長から叱咤叱咤のお言葉を頂いたことは言うまでもない。これ以外にも書面には書ききれない、いや書けないことが沢山ある。過去のことを思い出すと今でも背中を冷たいものが走るくらいだ。

私がいいうのも何だが、父親も決して要領よく器用なほうではない。親子だからこそわかる。滅多に実家連絡しないが、娘の誕生日祝いのお札や時節の挨拶で電話すると、開口一番「お前、また何かやらかしたんか」幾つになっても親

は親。心配なのだ。冒頭の言葉もまさしくそこから端を発している。

今から二年前。現在の蔵波に異動となった。今年四月にふる里学舎青年寮（福祉型障害児入所施設）が開所し、八月一日からは定員十五名の強度行動障害者を対象とした施設の運営も始まった。ただ、今年の夏はコロナの影響で佑啓会の理念である「利用者も家族も職員も楽しく」を体現するのに苦労し、特に利用者の皆さんは活動が制限され、窮屈な夏を過ごさざるを得なかった。そのような状況下でも今春学校を卒業したばかりの若い職員が、懸命に日々の支援にあたっている。娘とそう年の変わらない職員達が、である。彼女・彼らからしたら大きなお世話だと思うだろうが、つい、親目線で見してしまう。若い職員が気持ちよく、働けるために自分が施設長として何が出来るのだろう。里見理事長がよくおっしゃる言葉がある。「人は活かし自分も活かされる」私自身は活かすよりも周囲の人間に活かされて今があると思っている。

本場に諸先輩方から専門員の皆さんまで多くの方に助けを得て、ここまでやってこられた。月並みだがこれからは少しでも一緒に働いてくれる仲間達を支えられるようになりたい。それが利用者への支援にも繋がると思っている。

でも言われるだろうな。「偉そうなこと言わんで言いんちゃ。お前は体を動かせ。さぼるな」

（ふる里学舎蔵波デイセンター施設長）

息子の生い立ちと将来

内藤 高広

長男の純平が「ふる里学舎」に世話になり始めてから早いもので五年の月日が流れようとしている。純平は平成七年四月、妻の実家のある船橋市で生を受けた。私は、ビールメーカー勤務の転勤族であったため、純平が母親のお腹の中にいるとき（妊娠七ヶ月）に赴任地の神戸で阪神淡路大震災に遭い被災した。神戸に隣接する芦屋市の自宅マンションの部屋は、今ほど薄型ではない大きなテレビが隣の部屋までぶつ飛び、冷蔵庫は無残に倒れ、食器はファミレスの景品の皿以外すべて割れ、玄関は建物のゆがみで開かず、水道とガスは半年以上使えなかった。家族が寝ていた部屋は幸い布団以外なかったため、全員怪我もなく無事であったことが奇跡のような出来事であった。



外出を楽しむ純平さん

純平の神戸での暮らしは、がれきの中でスタートした。散歩に出るとベビーカーを覆うカバーが粉塵で汚れ、呼吸器に害がでないか心配になるほどであったことを記憶している。幼少時の彼は、感情や欲求を強く訴えることは稀で、黙々とマッチ棒をきれいに並べたり、ディテールにこだわった絵を描き続ける日常を過ごし、「将来は芸術家かな？」などと能天気なことを言っていたことが懐かしい。しかし同時に、親と目を合わせない、言葉が遅い、拘りの強い行動などがあり、三歳時の検診でAS

D（自閉スペクトラム症）と診断された。当時親としては、確かに愕然とし、息子の将来を心配した記憶はあるが、比較的切り替えも早く、前向きに目の前の事実を直視することができたように思う。純平は、地元療育センターで過ごす学級の先生方の手厚い支援を受けながらのびのびと成長した。

平成十一年秋の異動で今度は高知に赴任。純平は芦屋のボンから土佐の男になった。保育園、小学校の支援クラスでも手厚い支援を受け、南国土佐で逞しく成長した。たまの休みに清流仁淀川に遊びに行った際には、親がいくら探しても見つけれなかった土筆を「つ・く・し！」と指さし、いとも簡単に探し出したことは今でも昨日の日のように憶えている。視る力はかなり優れている。

高知での六年半の赴任を終え平成十八年春十四年半ぶりに東京に戻る。純平は小学五年生になっていたが、この頃から拘りが強くなり、身体も大きくなったことから親の手には負えないこともしばしばみられるようになり、学校からの電話連絡に戦々恐々とした日々が続いた。思春期を迎え、もう親だけの努力ではどうしようもなくなり、施設探しの日々が始まることとなるが、これが容易なことではなかった。

休みのたびに短期入所を引き受けてくれる施設をまわって一ヶ月単位で数ヶ所の施設を転々とする、純平にとつて最も苦手とする落ち着くことができない生活の始まりでもあった。両親ともに疲労感が溜まり、相談させていたいただいた相談支援事業所の方々の温かい励ましと迅速な行動力のおかげでふる里学舎とのご縁が生まれ、お世話になることができていく。とは言え五年間決して平穏無事な生活はできてはおらず、数々のご迷惑をお掛けしているが、ふる里学舎の皆さまの温かいご支援をいただき感謝の言葉しかない。先日、蔵波に新たに開所される心静寮を見学させていただいた。外観はリゾート地の洒落たロッジと見間違ふほどで、

佑啓会のセンスの良さは相変わらずである。内装に至っては、随所に利用者が見え、生活できる工夫が凝らされている。聞くところによると、銀座の超がつく高級寿司店を設計した事務所が手掛けた建物だとのこと、親である私が住みたいと勘違いしそうなくらいの印象であった。純平が今後心静かに落ち着いて過ごすことができるようにと心静寮の利用をおすすめいただいた。数々のご配慮をいただき感謝の気持ちで一杯である。



海で父との2ショット

ふる里学舎の職員の皆さまにご面倒をおかけすることが今後少しでも少なくなり、純平自身も新たな生活のスタートがスムーズになれるよう親としては、感謝の気持ちを持ち続けながら心静かに祈る次第である。非日常的なことが一番苦手である純平には転勤族であったこと、本当に申し訳なかったと思う。「純平、良く我慢してくれたな」（ふる里学舎蔵波 保護者）

待ちわびた瞬間

並木 傑

法人のSNS等で発信しているのが既に存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、佑啓会の里見吉英理事長が東京2020オリンピックの聖火ランナーとして選出をされました。当日、取材係として同行させていただきましたので興奮と感動の一場面を皆様にお届けします。二〇年の新年会。里見理事長より聖

火ランナーに決まったと話がありました。みんな、聖火ランナーはテレビで見ると当たり前で別世界のことなとどと思っていたので当然のことながら大盛り上がり。「マイクロスプーで応援に行こう！」「並走してテレビに映ろう！」「君は火を消しちゃいそうだから行ったらダメだ」などと唾を飛ばし合い冗談を言いながら遅くまで酒を酌み交わしていました。まだ中国の武漢市で原因不明の肺炎が発生していると小さく報道し始めたばかりで、そんな話題は誰の頭の片隅にもなかったと思います。

それから一ヶ月もするとクルーズ船でのクラスター発生やマスク不足の報道等が加速し、新型コロナウィルスの脅威が確実に迫ってきました。職員も正体不明のウィルスへの対策に不安も感じながら業務に当たる日々が続いていましたが、インフルエンザと同様に暖かくなれば落ち着くだろうという噂を信じ、聖火リレーが行われる七月を心待ちにしていました。しかし、その後も感染者は増加して行き二〇二〇年三月二十四日にオリンピックの一年延期が決まっています。

年が明け、オリンピックの正式な開催が決まり三月二十五日に福島県で聖火リレーがスタートしました。しかし新型コロナウイルスの感染拡大を受けて千葉県では、公道での聖火リレーが中止となり、代わりとなるトーチキスのセレモニーの実施が決まっています。集団での観覧や応援は禁止で一人のランナーにつき三名までしか会場に入れないということでしたが、その貴重な三名に五井の菌田が運転手、市原の須藤がカメラマン、私が取材係として同行させていただきました。

セレモニー当日の七月一日は梅雨真っただ中。朝に伊豆で線状降水帯の発生情報が出されたこともあり朝から雨模様でした。聖火ランナーは準備で早く会場入りし別行動になる為、後から須藤と二人で会場である蓮沼海浜公園に向かいました。会場に近づくにつれ少しずつ警備員や警察官が増えていき、会場の周りは沢山のパトカーやテレ

ビ局の中継車等が停まっており、何をやるわけでもない我々も緊張感が高まってきました。我々が会場に到着したときは、千葉県で一人目の千葉真子さんが点火した瞬間でアナウンスの声が聞こえてきました。観覧者が待機する場所では皆、自然と笑顔になり何とも言えない高揚感に包まれています。予定時刻が近づくにつれ弱くなっていた雨も止み、我々もステージ前に移動しました。セレモニーの出演が近づいた集団の先頭で歩く増田明美さんを見て、私のミハール魂に火が付き、聖火ランナーのユニフォームを着た理事長にも思わず大きく手を振ってしまったのです。我に返り馴れ馴れしいと後で怒られたらどうしようと思いましたが、実際に注意をされることはありませんでした。



蓮沼海浜公園にてトーチキス

聖火が繋がれて行き、いよいよ理事長の順番になりました。薄日が差し中、ギリシャの聖地アテネから運ばれた聖火が理事長の持つトーチに火が灯る瞬間は言葉が出ないほど感動的な瞬間でした。会場に来ることができなかった職員や利用者も、各施設でインターネットの中継放送を見ながら感動を共有していたようです。

セレモニー後のNHKのインタビューで聖火ランナーを務めることで伝えたかったことを聞かれた理事長は「コロナで窮屈な生活をしている障害者が沢山いること、またそれを支援している職員も緊張の中、頑張っているの、この姿を見て少しでも喜んでいただければと思います」と答えていました。日頃より『利用者者を真ん中に』『職員が楽しまなけ

れば利用者を楽しませることはできない』と話される里見理事長ならではのコメントだと思います。いつも大勢の人の前で話をする機会の多い理事長ですが、終了後に「今回はさすがにかなり緊張した」と話されていました。

持ち帰ったトーチですが、惜しむことなく各事業所に回していただき職員や利用者が記念写真を撮る機会をいただいています。また市原市教育委員会の依頼により市内の全小・中学校に貸し出すことが決まっています。

新型コロナウイルスにより通常の生活が送れない中、今回の聖火セレモニーは利用者や職員にとつて久しぶりの明るい話題になりました。まだ収束が見えない毎日が続いていますが、今後も一致団結し、やるべき役割を果たしていきたいと思っています。

今回、貴重な体験をさせていただき感謝の気持ちでいっぱいです。私自身は次に日本でオリンピックが開催されるときに前回の聖火を生で見たと孫に自慢するのが今の目標です。まだ子供も七歳と五歳なので、実現するには晩酌のアルコールの摂取量と夜勤明けのラーメンを制限しなくては…。

尚、トーチキスの瞬間やインタビューの様子はインターネットで理事長の名前で検索すると今もNHKのホームページで見られますので少し緊張した理事長の表情を是非ご覧になってください。

（ふる里学舎蔵波 係長）

編集後記

オリンピック、パラリンピックが熱かった夏。最高気温を記録する夏。今年の夏はとにかく『あつい』夏となりました。あたり前の日常が変化していく中、佑啓会は変化しつつも、利用者も職員も変わらない笑顔で日々過ごしています。暑い夏が終わる、秋の風を感じながら佑啓一七号をお届け致します。

（支援員 依田 育美）